

「やる気応援奨学金」レポート

驚きと発見に満ちた世界へ！
英国で国際政治や開発を学ぶ

法学部政治学科三年 河原 理紗（東京都立富士高校）



「イギリスという世界で大きな存在感を示す国で多様性に触れ、国際政治と開発、そして教育について学びたい」

「イギリスという世界で大きな存在感を示す国で多様性に触れ、国際政治と開発、そして教育について学びたい」

幸運にも二〇一三年の夏、「やる

私が留学先として選んだのは、イングランド北部の都市、マンチ

エスターである。かつて産業革命が始まった場所であり、有名なサッカーチームの本拠地であるため、この都市の名前を一度は耳にしたことがある人も多いのではないだろうか。



マンチェスター大学のメインキャンパス

マンチェスターはいわゆる「学生街」であり、数多くの留学生が滞在しているため、市内全体では二〇〇もの言語が話されている。そんな多様な性に満ちたマンチェスター大学で、私の留学生活は始まった。

授業に臨む姿勢の変化

九月になると諸外国から学生たちが集まり始め、キャンパス内が一気に活気に満ちてくると、いよいよ新学期の始まりである。

私は前期授業では国際政治について学ぼうと、安全保障、グローバルゼーション、イギリスの政策決定の授業を履修した。一つの授業は二時間の講義と一時間のチュートリアル、いわゆるゼミで構成されている。講義で基礎的な情報を学生に与え、チュートリアルでのディスカッションやディベートなどを通して更に理解を深める仕組みである。イギリスでは、学生たちに自ら学び、自分で考えることを求める。したがって、課題図書量が半端ではなく、チュート

リアルの準備に至っては毎週数百頁の論文を読むことが求められる。加えて、エッセーを書く課題も毎週あり、そのために自ら探し出した論文を読む必要もあった。覚悟はしていたものの、少しでも手を抜くとあつとと言う間に授業に置いていかれるという危機感と背中合わせの毎日。リーディングに時間が掛かる私は、図書館や自習室のパソコンにとらめっこをするのが日課となった。また、チュートリアルでは、ほとんどがネイティブスピーカーの中で積極的かつ論理的に発言するのは予想以上に難しい。発言をしなければ存在しないものと見なされるため、課題図書をしつかり予習して臨むのだが、議論の展開の速さに付いていけないどころか、聞き取ることも出来ない。一言も発言出来ずに、あえなく撃沈することも多々あり、後期こそはもっと頑張ってみせると奮闘を誓った。

そして後期授業では開発学、国際政治課題学、東欧比較政治につ

いて学んだ。課題の量は相変わらずではあったものの、ペースをつかみ始めたことで少しずつ余裕が生まれ、チュートリアルでも徐々に積極的に発言出来るようになった。前期にも感じたが、どの授業でもアジア人の視点は圧倒的なマインORITYである。前期にはそこに引け目を感じていたが、ある時全く違う意見だからこそ、そこに面白みを感じてもらえることに気付いた。他者と違うことは尊重され、自分の視点を大切にしているのだと感じ、後期ではむしろ自らのバックグラウンドをベースにした独自性を強みに出来るように

なったのである。また、論文も数をこなしたことでより素早くより内容の濃いものが書けるようになり、最終的には七三という1st yearの成績をもらえるまでになった。ささやかではあるが、自分自身の成長を実感することが出来た瞬間である。

日常生活

勉強に追われてはいたが、現地で仲良くなった友人たちとの日常生活なしには留学生活は語れない。私はイギリス人、マレーシア人、ハンガリー人、日本人の九人で一つのフラット（寮の一フロア）に



同じ寮で暮らしたフラットメイトたちと

住み、キッチンとリビングを共有していた。フラットメイトの半数を占めたイギリス人は皆それぞれ違う地方の出身で、全く異なるアクセントを持つていたため、初めは彼らのなまりを聞き取るのが出来ずに戸惑った。しかし、会話を重ねることでなまりにも慣れ、アクセントの多様さや特有の言い回しを面白がるようになっていった。例えば、「昼食」

のことを南部ではランチと言うのに対し、北部ではディナーと呼ぶ（ちなみに北部での「夕食」はテイー）。

ほかのフラットメイトも実に多様なバックグラウンドを持っていたため、キッチンに行った際に誰かに会って話をするのが楽しみでさえあった。朝トーストが焼き上がるのを待ちながらユダヤ教徒は入れ墨を入れてはいけないのだと学び、論文が煮詰まっている時でも紅茶片手に熱く東欧の歴史について語り合う。知らないことが世界にはたくさんあるのだと思いつける毎日であった。

もちろん共同生活には良い点も問題点もあるもので、キッチンにある流し台には、イギリスの「洗い物漬け置き文化」のおかげで常にお皿やコップが放置され、流しを使うことをためらうことも多かった。共同リビングの机には飲みっぱなしのボトルが乱立し、靴が片方だけ乗っていたりすることさえあった。

異なる価値観を持つ人たちと暮らしたフラットでの生活は驚きに満ちていて、日常生活の中でもこうした小さな「発見」を積み重ね、授業を受けるのとは異なる面でき

まざまなことを学べる環境であったのだと感じている。

日本のイメージについても「発見」があった。例えば、ある留学生から「日本人はオープンな国民性ではないから友達になるのが難しい」と思っていた、だから仲良くなれてうれしい」と言われた。そのようなイメージを持たれていたことに驚きつつも、お互いに新たな発見があったね、と笑い合った。一緒に生活して初めて分かることもたくさんあるからこそ、勉強に切羽詰まった毎日の中で息抜きに友人たちと過ごした時間は掛け替えのないものである。

教育実習

後期には、一つの大きな挑戦をすることになっていった。それは、現地小学校に教育実習生として赴任することである。イギリスの教育現場をこの目で見たいという願いがかなない、四カ月間にわたり週に一回、四年生のクラスを担当することとなった。実習先の小学校は、一クラス二五人ほどで、私のクラスではそのうちの四分の一がインド系移民の子供たちであった。実習内容としては、授業進度から少し遅れている児童たちをサポ

トしたり、屋外実験を一緒に行ったたり、時には児童たちを注意し叱ったりしていた。児童三人に英語の動詞の活用を教えるのはまだしも、クラス全員の英語チェックを任されて「Miss（私の呼び名）、次はこっちにきてー」とあちこちで同時に手が挙がることもあり、まさにてんやわんやであった。

また、日本にはないイギリスの教育の良さを実感出来た。例えば、チョコレートについて学ぶ授業では、カカオ豆の生産地で地理、材料の分量を決めて調理することで算数と家庭科、自らパッケージをデザインすることで図工を学んでいた。子供たちの好きなものを題



実習先の小学校の教室

材に、学ぶことに興味を持てるようにする仕組みは、知的好奇心を刺激するイギリスの教育制度としてとても印象的であった。また、キリスト教にとどまらず、イスラム教やヒンドゥー教、ユダヤ教について学ぶ宗教の授業があったことにも日本との教育の違いを感じた。実際に移民系の児童たちがいることから分かるように、他国からの移民が多いイギリスでは、他宗教を理解することが共生していくうえで大変重要であるのだと知ることが出来た。そういった点で学校教育という現場は、社会の縮図であると感じ、大変興味深かった。

また、私の担当クラスの担任の先生であったM.T.Gは、手拍子やタンバリンで子供たちを静かにさせるという、素晴らしいテクニクの持ち主であり、子供たちからも大いに好かれていた。彼からは、児童たちを一個人として尊敬すること、ユーモアを忘れずにけじめを付ける、という学校教育における大切なことを教えていただいた。実際の教育現場に密着したことで、家庭環境が子供たちの学習意欲に影響を与えること、学校教育が介入出来る範囲の限界、限られ

た時間内で実行を求められる仕事の多さといった、ハードな教育現場の実情を垣間見た。それでもなお、子供たちを教え、豊かな人生を歩んでいってほしいと願うすてきな教師たちと交流し、「Miss、見てみて！」と褒めてもらいに駆け寄り寄ってくる子供たちの明るい笑顔に触れたことで、教育は明るい未来を作る可能性の一つであると確信した。

留学生活で得たもの

私がイギリスのマンチェスター大学での長期留学によって得たものは数多くあるが、その中から三つ挙げたいと思う。

一つ目は「へこたれない気持ちの強さ」。それまで生活していた所と全く異なる環境に身を置いて生活することは、想像していた以上に大変でまさにサバイバルな毎日であった。言葉を一〇〇%運用することが出来ない自分がかしこく、ありえないことが起こるのが日常茶飯事であり、留学中は絶え間なく出現する問題たちと格闘し続ける毎日。そのような中で、どんな状況でもめげないしぶとさや傷付いてもまた向き合おうと思える強さが育まれたように思う。

二つ目は「現地で出会った友人と過ごした時間」。違う国で育った彼らは他文化の奥深さを教えてくれる師であり、日々の生活で直面する生きづらさを分かち合える仲間でもあった。これまで歩んできた道のりも、目指している将来像も異なる中、それでも縁あって知り合って友人となった彼らと過ごした時間、彼らが伝えてくれた知識はこれからも消えることのない、留学中に得た宝である。

そして三つ目は「感謝の気持ち」。一〇カ月の留学生活を始めるに当たって、現地に渡る前から本当にたくさんの方々に支えていただきました。くじけそうな時、応援してくださいる方々がいらつしやるのがどれだけ励みになったか分かりません。支えてくださったという方々を思い出す度に、こんなことで弱音を吐いてはいけないと自分を奮い立たせることが出来ました。

さまざまな場面で力になってくれた両親と友人たち、留学前から貴重なアドバイスをくださった先生方、並びに「やる気応援奨学金」という形で私の夢を形にしてくださったOB・OGの皆様により御礼申し上げます。